

## 論 文 要 旨

鹿児島大学

### **Development and Validity of an Intrapartum Self-Assessment Scale Aimed at Instilling Midwife-Led Care Competencies Used at Freestanding Midwifery Units**

助産師ユニットで行われる助産師主導ケアの実践能力を用いた  
分娩期自己評価尺度の開発と妥当性

氏 名 井 上 尚 美

#### 緒言

助産師の専門的能力は、長年の経験で培われた実践的な経験の量と関係があり、助産院で助産師主導のケアを提供することで育まれるともいわれている。Hunterらは、助産師主導のケアを行うことは、助産師が出産は正常に進行するという確信を持ち、女性の能力を信頼することであると述べている。助産師が助産ユニット（助産院や院内助産院）でケアするためには産科ユニット（産科医療施設）で使用される医学的学習アプローチから離れる必要があるともいわれている。助産師が助産師固有のアセスメントや女性の能力を信頼したケア能力を高めるためには、助産師主導のケアが行われる助産ユニットでの経験が必要かもしれない。しかし、日本のように助産ユニットの数が10.2%と少ない国では、助産師が専門的な能力を向上させる仕組みが必要である。

本研究の目的は、産科ユニットで働いている助産師が助産師主導ケアの実践能力を早期に高めるために、分娩期の自己評価を重ねる際の尺度の開発とその妥当性を検証することである。

#### 研究方法

期間：2017年9月～2018年3月

方法：本研究は2段階で尺度開発を行った。第1段階では文献レビュー、質問項目の妥当性の確認、専門者会議での議論、2回の予備調査を行った。第2段階では本調査による尺度の妥当性と安定性の検証を行った。

対象：本調査は、日本国内の65の産科施設で働いている助産師401名を対象に行われた。

分析：1) 項目分析では天井効果を確認し、 $>0.8$ で統合を行った。

2) 探索的因子分析は、主因子法、プロマックス回転で行い、因子負荷量0.4を基準とした。

3) 信頼性の検討ではCronbach's  $\alpha$  信頼係数により確認を行い、さらに再テスト法により下級内相関係数を確認し安定性の検討を行った。

4) 妥当性の検討は、G-P分析を用いて行った。

本研究は、鹿児島大学医学系疫学研究等倫理審査委員会で承認を受けて実施した(No. 170094 (371) 疫-改5)。

## 結果

第1段階では、専門者会議による検討と2回の予備調査により68項目からなる尺度が作成され、第2段階の最終版尺度はIV因子40項目で構成された。第I因子「産婦の意思と家族の出産を尊重したケア能力」15項目、第II因子「責任範囲をわきまえた急変時の判断と対応能力」9項目、第III因子「産婦の変化と母児の状態に合わせたケア能力」9項目、第IV因子「高い情報収集力と的確な総合判断」の7項目である。尺度全体のCronbach's  $\alpha$  信頼係数は0.982であった。また、再テストの下級内相関係数は尺度全体で $r=0.794$ であった。基準関連妥当性のG-P分析では、CLoCMiPレベルIII認証の取得状況、分娩介助の経験年数、分娩介助件数すべての項目に有意な差を認めた( $p<0.001$ )。

## 考察

本尺度は、助産ユニットでの助産師の実践能力を基に開発を行ったが、最終的に非言語的コミュニケーション、母子への緊急対応、効果的な分娩促進と産痛緩和、経験知と五感を使った総合的判断力と専門性の高い助産師主導ケアの実践を反映した項目で構成された。これは、国際助産師連盟(ICM)の助産実践に必須の分娩期コンピテンシーも網羅されており、基本的な能力から高い専門性を示す助産師主導ケアの実践能力を自己評価できる尺度になっていると考えられた。また、再テスト法やG-P分析により、安定性・妥当性が検証できたことから、産科ユニットで働く助産師に活用できる尺度であることが示唆された。今後はより多くの助産師による検証を行い、カットオフ値の再検討や更なる改良が必要である。

## 結論

本研究では、助産師の実践能力を早期から向上させ、女性に対して質の高い支援ができる助産師主導の分娩期自己評価尺度が開発され、その妥当性が検証された。

掲載雑誌 International Journal of Environmental Research and Public Health.2023, 20(3),1859;  
<https://doi.org/10.3390/ijerph20031859>